

尾島ねふた | 尾島町と弘前市とのつながり

昭和 60 年に日本ふるさと塾主宰の萩原氏が青森県弘前市にある弘前青年会議所の講演依頼を受け、弘前市を訪問しました。

その際、見学した博物館にて津軽藩の中に尾島町の名前があるのを発見し、その話を後援会の中で触れたところ、弘前青年会議所のメンバーが興味を持ち、同年 6 月 1 日に尾島町を訪れました。この訪問により、400 年の時を超えた交流が始まります。

尾島町と弘前市とのゆかりは古く、戦国時代末期までさかのぼります。

津軽藩初代藩主 津軽為信は、豊臣秀吉没後の関ヶ原の合戦において、東軍(徳川家康側)に味方し、軍勢を率いて美濃国(現在の岐阜県)を責めました。

この功績により、家康から上野国(現在の群馬県)八ヶ村二千石を加増され、現在の尾島町を周辺に津軽藩の飛び地ができました。

また、大館には、天和 3 年まで大館村を領していた津軽藩の代官である足立氏が居住していました。足立氏の五輪塔と一族の墓は、現在も大館の東楊寺境内にあります。

さらに、津軽藩二代目藩主 津軽信枚は、側室である辰子(石田三成の三女)をこの大館に住ませ、大館御前と呼びました。辰子は長男 信義をこの地で産み、寛永 8 年、13 歳で家督を相続して津軽藩三代目藩主となりました。

これらの史実を基に、尾島町と旧尾島町商工会青年部と弘前青年会議所との相互交流が始まりました。

交流が始まった翌年、昭和 61 年 8 月の尾島まつりに旧尾島町商工会青年部の熱意を受け、「弘前ねふた」を弘前青年会議所メンバーや津軽じょっぱり太鼓の会、弘前七夕会の方々の尽力により、出陣し、この年の祭りは大成功のうちに終わりました。

その 2 年後、昭和 63 年には、弘前市の茂森新町から大型ねふたを譲り受けるなど、尾島でも「ねふた」に対する意気込みが盛んになり、垂 m 釣り勝ち被くと「ねふた囃子」の音が聞こえてくるようになりました。

そして平成 3 年 11 月 25 日、弘前市と尾島町との友好都市締結の調印が行われ、現在では祭りのみならず、産業や文化、人の交流も活発に行われています。